

社会科学研究所 2019 年度春季実態調査 北九州・佐賀の急加速と蝸牛の如き産業変化 —北九州～久留米～武雄～伊万里～有田— 行程記録

樋口 博美

はじめに（今回の実態調査）

専修大学社会科学研究所では、2020年2月25日(火)～29日(土)にかけて早春の九州を訪れ、2019年度春季実態調査を実施した。「北九州・佐賀の急加速と蝸牛の如き産業変化」と題する本調査では、小倉駅を起点として福岡県の北九州と佐賀県の伊万里・有田を中心に行程が組まれた。本稿はその行程記録である（※文中の写真は全て筆者撮影）。

今回の実態調査は、折しも新型コロナウイルス感染症への警戒が日本国内においても徐々に高まってきている時期であった。事務局では、直前まで感染症の国内状況をにらみながら実態調査を予定通り実施するか否か、視察等の受け入れ先にも確認を入れるなどして検討していた。それでも一週間前には「無理をせず、十分な注意を払って行程を進める」という前提のもとでの実行を決定した。

しかし、私たちが九州に入ってからすぐに、訪問予定であった企業から「今回は視察受け入れを見送りたい」旨の連絡が入るなど、今にしてみれば、ぎりぎりのところでの実践であったことが思い返される。実態調査中に撮った写真の中の参加者が互いにとっても近い距離にありつつも、ほとんどがマスク着用であることもその時期の状況を示している。確かに状況は現在ほど深刻ではなく、私たち参加者は皆で会食をし、バス移動し、見学し、迎えられた会議室で議論をし、“ソーシャル・ディスタンス”という言葉や意識はまだ誰の頭の中にもなかった。

したがって、今回の行程記録は、まだ新型コロナ感染症が現在のような社会状況を引き起こす前の、2020年2月時点での実態調査見聞記録であることをご了解いただければと思う。

全体行程概要

2月25日(火)

14:00 小倉駅集合

14:30 北九州市役所 産業経済局 訪問・説明・質疑応答

16：00 門司港駅周辺の見学（説明）

18：00 ホテル到着

18：30 結団式

2月26日(水)

8：30 ホテル出発

9：30 シャボン玉石けん株式会社 訪問・見学（説明）

13：00 北九州市環境ミュージアム 訪問・見学（説明）・質疑応答

14：15 アジア低炭素化センター（於：北九州環境ミュージアム内）による説明・質疑応答

16：30 ホテル到着

2月27日(木)

8：30 ホテル出発

9：00 北九州イノベーションギャラリー（北九州産業技術保存継承センター）訪問

（①室長によるレクチャー、②東田第1高炉史跡見学、③映像視聴）

→久留米へバス移動（ここから全日バス移動）

13：30 ダイハツ九州（株）久留米工場 訪問・見学（説明）・質疑応答

15：10 株式会社ノリタケカンパニーリミテド 久留米工場 訪問・見学（説明）・質疑応答

18：00 武雄市図書館 訪問・見学（自由行動）

19：00 ホテル到着

2月28日(金)

9：30 ホテル出発

9：50 伊万里大川内山 訪問・見学（自由行動）

13：20 伊万里まちあるき テーマ：幕末・明治期の伊万里近代化の軌跡

（伊万里駅～陶器商家資料館～佐賀銀行資料室～伊万里歴史民俗資料館等）

16：00 有限会社 やま平窯（有田焼窯元） 訪問・見学（説明）・質疑応答

18：00 ホテル到着

2月29日(土)

8：40 ホテル出発

9：30 佐賀県陶磁器工業協同組合 訪問・見学（説明）・質疑応答

- 11：00 泉山磁石場（有田焼原料陶石の採掘場）訪問・見学
12：00 ギャラリー有田（昼食休憩）
13：20 佐賀県立九州陶磁文化館 訪問・見学
15：10 有田町歴史民俗資料館 訪問・見学（説明） →佐賀空港へバス移動
17：10 佐賀空港にて終了・解散

実態調査の行程とその記録

第1日目：2月25日(火)

14：00、小倉駅構内に併設された JR 九州ステーションホテル小倉のロビーに参加者が集合すると、すぐに北九州市役所への徒歩移動を開始した。賑やかな商店街を通り抜け、大通りに出て右に進むと間もなく紫川の向う右手に、背後に小倉城を配した市役所の建物が見えてきた。

訪問地 1：北九州市役所 産業経済局 [北九州市小倉北区]

北九州市役所の産業経済局を訪れると、新成長戦略推進部産業政策課の長沼幸一氏（産業政策係主任）に出迎えられ、眺めのいい窓際の会議室へ案内された。最初に北九州市の成り立ちと歴史について、次に市の経済とくらしの現状、これからの経済戦略についての説明を受けた。

北九州市では 2002 年度～2018 年度の 16 年間で刑法犯認知件数が 84%減少しており、その減少率は政令指定都市第 1 位であるという。次世代育成環境ランキング（NPO 法人エガリテ大手前データ）では 2018 年度まで 8 年間政令指定都市第 1 位、合計特殊出生率は 2017 年度 1.60 でこれも政令指定都市第 1 位であった。これらのデータに現れているような安心・安全を実感し、子育てしやすい街を行政として目指しているという。たとえば、店が“おむつ替えスペースを整えています”というサインを持つ「赤ちゃんの駅」登録制度には市内の多くの商店街が協力している話など具体的な内容が多々紹介された。

しかし一方で、生産年齢人口が低下しており市の総生産の推移が目標の 4 兆円になかなか到達しないことが北九州市の課題であるという。それに対する新成長戦略として同市では、①地域企業が元気に活躍し続ける環境整備、②IT に関連づけられる国内潜在需要に適応したサービス産業振興、③自動車やロボットを中心とする高付加価値ものづくりクラスターの形成、④環境にもかかわるグローバル需要を取り込むビジネス拠点の形成、⑤再生可能エネルギーを念頭に置いた地域エネルギー拠点の形成といった 5 つの方向性を持ってアジアの先端産業都市を目指している。その戦略の要が雇用創出であり、特に中小企業の競争力と成長を向上させながら、働く若い世代を中心とした人材確保が目指されているとのことであった。そのためにも既述の

ような子育て世代の若者が安心して住むことができる街づくりが必要不可欠となってくるのである。紹介のあったIoT ともものづくりをテーマにしたビジネスアイデアコンテストの開催、ロボット開発・普及による産業振興の導入や支援も若者にとっての魅力的な雇用創出の仕掛けとして期待されている。

九州に到着したばかりの一行にとって、産業・経済の歴史や現状についてのお話は、北九州市の導入として、体系的に把握する上で大変有意義なものであった。

訪問地 2：門司港駅と駅周辺の視察 [北九州市門司区]

小倉駅から JR 鹿児島本線に乗車すると 10 分ほどで北九州市発展の“玄関口”となった門司港駅へ到着した。門司港近辺を地元ボランティアの方の案内で歩くことになっていたが、駅についた頃から小雨が降り始めた。

明治 24 (1891) 年に現在地より少し東の方に九州鉄道の起点駅として開業したという門司駅は、駅舎改築の際に現在の海岸部に移転・開業した (大正 3 (1914) 年竣工)。昭和 17 年の関門海峡開通の時に現在の門司港駅に改称している。老朽化対応や耐震補強のために、2012 年から 2019 年まで解体・修理が行われ、大正期の駅舎の雰囲気を甦らせるべく改修が施されてきたのであろう、旅行者にとっては特に印象的なレトロモダンなデザインとなっていた。

門司港駅が日本で初めて国の重要文化財に指定された駅であるとのことで、まずは構内を見学して回った。かつての一・二等客車乗客の待合室は現在みどりの窓口と観光案内所になっていて、階段で 2 階に上がると大正・昭和期に駅舎 2 階で営業していたという“みかげ食堂”を同名で復活させたレストランがあった。これを抜けて廊下を進むと、旧貴賓室 (現在はレストラン個室として使用) が見学できるようになっていて、さらに廊下奥のエレベーターで 1 階に降りるとすぐにカフェがある、という構造になっていた。

その後、門司港駅を出て、大正 10 (1921) 年に三井物産の接客・宿泊施設として建築された北九州市旧門司三井倶楽部 (アインシュタインが宿泊した部屋もあり、林芙美子記念室も併設)、大正 6 (1917) 年建造の大阪商船門司支店を修復したレンガ造りの旧大阪商船を見学し、関門海峡を左手に見ながら (写真 1)、歩行者専用のはね橋ブルーウイング門司の前に来た。雨に煙ってよく見えなかったが、関門海峡の向こう側には巖流島や壇ノ浦があるという。現在も、関門連絡船によって本州-九州間 (唐戸-門司) は海上運航時間 5 分で結ばれており、市民の大切な足となっている。はね橋を渡ると、明治 45 年に建てられ昭和期まで税関庁舎として使用されていたというこれもレンガ造りの旧門司税関が現れ、門司港発祥の場である第一船溜まり (写真 2) に沿って歩くと再び旧門司三井倶楽部の裏手に戻ってきており、門司港駅はもう目の前であった。



写真 1：関門海峡（右奥に関門橋が見える）



写真 2：門司港発祥の第一船溜まり
（現在は周遊船発着場）

門司港駅から電車で小倉駅へ戻り、ホテルのチェックインを済ませると、私たちはすぐに夕食を兼ねた結団식을ホテル内レストランで開催した。地の食材を使った料理を楽しみながら参加者同士の懇親を深めた。

第 2 日目：2 月 26 日(水)

8:30 過ぎに JR 鹿児島本線に乗車し約 30 分、折尾駅で下車して JR 若松線に乗り換えると 10 分もしないうちに二島駅に到着した。駅からシャボン玉石けん本社へは徒歩で向かい、20 分ほどすると見慣れたシャボン玉石けんのシンボルマーク“シャボンちゃん”が壁面に大きく描かれた建物が見えてきた（写真 3）。九州市若松地区の二島工業団地の中にシャボン玉石けんはあった。

訪問地 1：シャボン玉石けん株式会社 [北九州市若松区]

シャボン玉石けんは、1910（明治 43）年「森田範次郎商店」として創業し、1949（昭和 24）年「(株) 森田商店」を設立（先代森田光徳社長就任）、1987 年の新工場落成の際に「シャボン玉石けん（株）」へ社名を変更、現在地に移転して今に至っている（現在資本金 3 億円）。今回お目にはかかることはできなかったが、現社長の森田隼人氏は専修大学経営学部卒とのことで私たちは多少なりとも勝手な親近感を覚えながらの訪問であった。

工場見学の前に説明会場に通され、通信販売部の方からシャボン玉石けんそのものの特徴など基本的な話を聞いた。シャボン玉石けんは、牛脂と無農薬栽培のパーム油、米ぬか油などの天然油脂を原料としており、熟練技術を要する「ケン化法」によって製造されている。これは、油脂に含まれた保湿成分を残す釜炊き製法で 1 週間～10 日ほどかけて製造しているという。原

料に石油を使用し4～5時間で完成する「中和法」製造による合成洗剤との違い、時間差が品質差になるという説明もよく理解できた。釜炊きをする職人は、視覚だけでなく、時に音や匂い、味覚や触覚など五感を働かせて石けんの変化を調整しているのだという。

もともと合成洗剤を製造しており、高度経済成長期にはその売り上げも上々だったシャボン玉石けんは、1971年、当時の国鉄から「合成洗剤で機関車を洗うと錆びが出るので、無添加の石けんを作ってほしい」という依頼が舞い込む。これに応じて作った無添加石けんの試作品を先代社長が使用すると自身が長年悩まされてきた湿疹が治ったこと、そのあと再び合成の自社製品を使用すると湿疹が再発したことから「身体に悪いと分かった商品を売るわけにはいかない」と1974年に無添加石けんの製造、発売に切り替える決心をする。売上はそれまでの1%になり、100人いた従業員が5人にまで減ってしまうのだが、信念と経営方針を変えずに今日まで来たのがシャボン玉石けんである。

ここ九州の若松地区にしかないという工場の見学では、工場内に設置された見学パネルや映像、働く人々の様子を見ながら（写真4）、途中、釜炊き後で成型直前の石鹸の感触を試す体験もさせてもらえる（写真5）。石鹸は24,000個を製造するラインが2ライン稼働しており、1日当たりの製造量は48,000個になるという。在庫がなくならないよう基本的には見込み生産を行っているとのことであった。



写真3：本社入り口、工場はここのみ



写真4：シャボン玉石けんの工場内で話を聞く



写真5：炊きたての“絞れる”状態の石けん

工場見学ののち、シャボン玉石けん商品の直接販売フロアでは、ほとんどのメンバーが自分の興味ある石けん類を購入した。シャボン玉石けんをあとにした私たちは、次の場所に向けて

タクシーに分乗、JR スペースワールド駅近くのイオンモール店内で簡単な昼食休憩を取ると、そこから次の訪問先までは徒歩5分であった。

訪問地2：北九州市環境ミュージアム [北九州市八幡東区]

13:00に八幡の北九州市環境ミュージアムへ到着すると、ミュージアム館長の中菌哲氏が入り口で出迎えてくれた。入ってすぐのエントランスの床には、北九州がズームされた大きなマップが広がっており、八幡製鐵所や当時石炭等を運ぶ際に使用された鉄道、河川、運河等の場所を確認しながらの北九州産業発展についての説明となった（写真6）。



写真6：中菌氏（右から2番目）による床地図での説明



写真7：洞海湾、死の海についてのパネル説明

次に、ミュージアムの展示場に案内されると、前半部分は、1960年代を中心に環境被害の実態がどのようなものであったのかを知るための展示となっていた。たとえば、大量に降り積もった粉塵や煤塵が固まってしまったという小学校の雨どいや、畳一畳の面積に1か月で積もった煤塵量の実物展示、工場排水によって魚も住めない「死の海」となった洞海湾の海の色を示したパネル、洞海湾のヘドロの標本、一見何かのセレモニーかと思うような洞海湾沿岸の工場煙突から噴き出す七色の煙の様子など、その異様な公害状況が伝わってくる展示と説明が続いた（写真7）。そして、展示内容は公害追放のための取り組み状況へと移っていく。戸畑区を中心とした婦人会が独自の勉強を重ねて声を上げた公害防止運動に始まる「市民」の取り組み、ここに始まる「企業」の環境負荷削減、「行政」の環境監視体制、法律規制の確立、市民・企業・行政の三者が信頼関係を築いていく経緯など環境汚染が人々の努力と協力で改善されていったことが詳細に解説されていた。展示の後半では、公害克服過程での多くの経験が環境技術のノウハウとして蓄積され、国際協力としてそれが海外貢献へと結びついていったことが示されて

おり、最後に、中館館長から現在北九州市が目指している SDGs 先進都市としての活動状況などを説明いただいて環境ミュージアムの視察は終了となった。

訪問地 3：アジア低炭素化センター [北九州市八幡東区]

北九州環境ミュージアム視察後、同ミュージアム会議室において、北九州市環境局に設置されているアジア低炭素化センターの櫛山智氏（アジア低炭素化センター担当課長）と永江好子氏（同事業運営係長）からセンターについての説明と質疑応答に対応いただいた（写真 8）。

北九州市は 2008 年に政府から「環境モデル都市」に指定されており、その行動計画実現のための中心的役割を担う部署として 2010 年に設置されたのがアジア低炭素化センターである。その名のとおり、アジアにおける低炭素化の仕組みを作るために、経済産業省、環境省、外務省等の国の資金を活用し、ニーズのあるアジア現地において事業可能性調査、実証実験、計画、事業化、のステップを踏みながら北九州市ひいては日本の環境技術を集約して環境ビジネスを推進していくものである。これまで北九州市を中心とした国内 100 社以上の企業ビジネス展開を、アジア諸国の都市環境インフラの整備と発展のプロジェクトに結びつけるべくプロデュースを行い、実現させてきた。その理念の核となるものが公害を克服したグリーンシティの歴史を持つ“北九州モデル”である。たとえば、インドネシア・スラバヤ市では、社会制度の構築や市民意識の変革などのソフト面も含めた持続可能なまちづくり計画の策定を目指しながら廃棄物・上下水道・エネルギー・都市開発といった分野で、グリーンシティ輸出モデルとしてのプロジェクトを展開してきた。事業運営係長の永江氏の言葉を借りれば、「環境と経済発展の両立を証明する活動を行ってきた」のが同センターである。アジアの国々との国際協力関係を構築しながら、それを国内企業の国際ビジネスとして事業化（成立）させる、そのための調整役といった位置づけであろうか。



写真 8：アジア低炭素化センターについての説明と質疑応答



写真 9：アジア低炭素化センターの櫛山氏（後列左）、永江氏（前列右）とともに

これまで16か国80都市で211のプロジェクトを展開しているが成立しているのは70件で、事業化までには大変な時間がかかること、成立有無の一番の課題はやはりコスト面とのことであり、質疑応答の中では、センター運営の課題や難しさについても言及された。新たなパートナーシップも模索しており、私たちが訪問した時点では、2020年秋にアジア地域を中心に投資家や企業CEOら400人以上が参加予定の“Horasis（チューリッヒ本拠の世界的シンクタンク：会議を通じて持続的の未来のためのビジョン設定を目的とする）ミーティング”を日本で初めて北九州で開催することになっているとのことであった（※2020年7月9日付で、コロナの影響による開催1年延期が発表されている）。環境ビジネスという興味深い話をうかがった後、記念撮影をして（写真9）ミュージアムでの視察が終了となった。

第3日目：2月27日(木)

前日に予約した昼食用弁当をホテルフロントで受け取り、本日最初の訪問地へ向けて出発した。JR鹿兒島本線・博多行に乗車し、スペースワールド駅で下車すると駅のすぐ隣にそびえたつ八幡製鐵所高炉跡が目に入る。高炉前の道路を挟んで向かいにある建物が目的の北九州イノベーションギャラリーであり、前日に訪れた北九州環境ミュージアムと隣接していた。

訪問地1：北九州イノベーションギャラリー（産業技術保存継承センター） [北九州市八幡東区]

北九州イノベーションギャラリー（※以下KIGS）では、工業都市として蓄積されてきた北九州の3つの資産（人材、技術、産業遺産）を活用しながらの、人材育成、産業技術の保存継承、産業遺産を用いた情報発信、そして技術革新の機会創出を活動目的としている。到着するとセンター内のプレゼンテーションスタジオに通され、KIGS教育普及推進室長の園田澄利氏から「北九州の“ものづくり”の歴史とこれから」についてレクチャーいただいた。北九州地域の産業発展史をひも解くと、日本全体の採炭量の30～40%を占めていたのが筑豊の「採炭」であり、官営八幡製鐵所が1901年に操業を開始すると今度は「製鉄」で近代産業をけん引、やがて太平洋ベルト四大工業地帯の日本最西端の工業集積地帯の中心となって日本の重厚長大産業を発展させてきた。1963年の八幡製鐵所従業員数は43,606人、その家族を含めるとこの辺りはさまざまな地域、社会コミュニティが存在したことになる。現在、かつての北九州工業“地帯”は、北九州工業“地域”と呼ばれ、「少し格下げになった」と園田氏は付け加えた。一方、工業地域としての発展は大きな公害問題も引き起こす。前日に北九州市環境ミュージアムで見た展示や話と重ね合わせながら、煤煙の空、大腸菌も住めないといわれた死の海から、公害克服への取り組みの結果、現在では済んだ青空と車エビのとれる海が戻ってきた（大々的なニュースになった）こと、その経験を生かした公害対策技術の環境産業へ転換が1990年代から行われ

てきたという話をうかがった。環境産業に結びつく産業展開の一つにシャボン玉石けんがあり、目指されてきた環境モデル都市としての在り方がアジア低炭素化センター設立へ結実し、北九州市による新たな産業と人材育成の模索につながることを九州入りしてから3日間で訪問した先々のまとめをここ北九州産業の原点の地で得たように感じた。レクチャーの後半では、やはり現在の北九州の強みと誇りは「環境」と「技術」であることが強調され、KIGSにとって重要な、産業革命遺産（2017年世界遺産登録）についての説明もあった。園田室長のレクチャーの後に視聴したビデオの中では北九州エリアの官営八幡製鐵所旧本事務所（1899）、同修繕工場（1900）、同旧鍛冶工場（1900）、遠賀川水源地ポンプ室（1910）が世界遺産登録されており、釜石市や伊豆の国市など8県11市に分布する施設とともに、西洋から非西洋への産業化移転が成功したことを示す明治日本の産業革命遺産群が対象となったもので構成されていることが紹介されていた。さらに、それらの「関連遺産」として位置づけられているのが次に視察することになっていた東田第一高炉であった。

私たちは東田第1高炉跡の見学のために外に出た。歩道橋を渡るとすぐに跡地敷地内となった。鉄鉱石を溶かして銑鉄生産を行う高炉は、ドイツの技術を導入し最盛期の八幡地区では10基建設されたという。現在残っている高炉は、1962年～1972年まで操業した第10次改修高炉（公称能力900トン）で（写真10）、これを後世に伝え残すために北九州市が買い取っており、表面には白塗りの化粧が施されている。高炉上方に掲げられたプレートには八幡に初めて火の入った年である「1901」が記されている。この年が八幡の地における輝かしい近代産業の幕開けであり、また苦難の歴史の始まりにもなったのである。

高炉跡には、所々に当時の様子がわかる写真パネルが掲示され、また出銑作業をする実物大の人形によって仕事の様子が再現されている等、当時の人々の工場での情熱やまちのくらしの活気が伝わってくるものであった。参加者の質問に答えていただきながら（写真11）高炉見学



写真10：左が10代目の高炉、右が熱風炉



写真11：高炉跡の下で説明を聞く

を終え、再びプレゼンテーションスタジオに戻ると安川電機を紹介した『赤い衝撃 ～モーターマン全電気式ロボットへの挑戦』と、ゼンリンを紹介した『夢のカーナビ ～デジタル地図の革新』の2本の映像を視聴し、北九州の産業の未来についても考えながら KIGS での視察を終えた。

また、北九州イノベーションギャラリーでは、視察・見学の最中に、翌日用に新型コロナウイルス感染症拡大による閉館のお知らせが張り出された。

この日から配車された貸切バスに私たちが乗り込むと、バスは次の目的地久留米市に向かって出発した。ここから先はすべてバス移動での行程となった。

訪問地2：ダイハツ九州（株）久留米工場 [久留米市田主丸町]

バス車中での昼食を取りながら、1時間半ほどで久留米市のダイハツ九州（株）久留米工場に到着した。

ダイハツ九州株式会社は1960年に前橋市で設立し、2004年に本社と工場を大分に移転、2008年に今回訪れた久留米工場が稼働を開始した。前橋からの移転理由は、前橋で敷地が拡大できなかったことと物流拠点としての不便さにあったようだが、九州には自動車産業を支える既存の地場産業地があったことが移転の決め手となったそうである。久留米工場には溶湯、粗材、加工・組付の工場があり（車輛製造はしておらず、それ以外は同じダイハツグループの大阪池田、京都、滋賀の関西圏で生産）、年産32万4千基のエンジン生産能力は軽自動車両用に特化されて稼働している。現在昼夜2交代で、500名の従業員が一日あたり1600基を生産する。

最初のPRDVD視聴では、450種の刃具を使用して生産した部品を購入部品300点と合わせて組み立てていくことや、工場建物スペースをはじめ工場ラインや工程数も小さく、短く、減少させることによって排出CO₂を削減し、環境負荷の軽減を目指していることが説明されていた。さらにSimple、Slim、Compact（SSC）が工場コンセプトであり、地域の緑と水、ひいては未来を守るGreen & Cleanが工場のスローガンであること、さらに県内の若者の雇用・採用促進に力を入れていることなど地域密着型の工場であることがアピールされていた。視聴が終わると工場建屋前で記念撮影をしてから見学に入った。

最初の工程である鋳造加工は実際に見学することはできなかったが、見学通路にその工程が展示されており、アルミを溶かして金型へ入れ部品成型を行う過程が説明された。機械加工では、アルミのシリンダーヘッドや鉄のクランクシャフト等の粗材が加工されており、削りカスが1日3万トン出るのだそうだが、NC工作機械の並ぶ加工場はほとんど無人で機械の交換やチェックを行う人だけとのことであった。次の組付では、社内加工の部品と関連会社からの部品を合わせて組付け、エンジンを完成させる場所になっている。均等に配置されている人々が、流れているラインの持ち場前で規律的に動いていた。ヘルメットや帽子の色と、そこに付され

た線の色や数によって作業内容やキャリアの違いが分かるようになっていた。

工場内は工場コンセプトの通り、ダウンサイズした工作機械や工程をスリム化させるなどの工夫が施されていたが、働き手としての心理的狭さは感じられない、とのことであった。興味深い工場見学を終えると、私たちは同じ久留米市田主丸町にある次の訪問先ノリタケカンパニーリミテドに向けてバス移動した。

訪問地3：株式会社ノリタケカンパニーリミテド久留米工場 [久留米市田主丸町]

少し遅れての到着にもかかわらず、工業機材事業本部 製造本部の中川基久夫氏（久留米工場次長）と久保哲也氏（製造管理部次長）に丁寧に迎えられ会議室に案内されると、最初にノリタケカンパニーリミテド（※以下ノリタケ）の沿革と事業内容、そして久留米工場についての説明を受けた。

ノリタケは、明治37（1904）年創立、資本金156億、名古屋市に本社を置き、国内外併せて27のグループ会社を持つ（グループ含む従業員数5,091名）セラミックス製造技術関連事業を展開する企業である。私たちが訪問したのは、その事業所の一つである久留米工場であった。ノリタケは他の5つの独立した企業とともにセラミック企業集団森村グループを形成する一企業であり、森村グループは明治9（1876）年に森村市左衛門と森村豊兄弟が創立した貿易雑貨商：森村組に始まる。市左衛門が弟の豊をニューヨークに派遣し、日本陶器などを販売するなかでやがて欧米人の生活必需品である洋食器に着目、その製造・販売を目的に1904年に創立したのがノリタケの前身「日本陶器合名会社」であり、本格的な食器販売輸出が始まったのである（ゆえに森村組がノリタケのルーツということになる）。大正6（1917）年には「日本陶器（株）」を設立、1981年に「ノリタケカンパニーリミテド」へ社名変更して今に至っている。他に森村グループとして、創業来の森村組の伝統を継ぐ①森村商事（株）、大正6（1917）年に日本陶器合名会社の衛生陶器部門が分離・独立した②東洋陶器株式会社（現・TOTO（株））、大正8（1919）年に磚子部門が分離・独立した③日本磚子株式会社（現・日本ガイシ（株））、さらに同年（大正8年）に設立した④大倉陶園（現・（株）大倉陶園）、昭和11（1936）年に日本ガイシから分離・独立した⑤日本特殊陶業（株）がある。これら5社とともに現在もノリタケは森村グループに密接に関わっており、最近では太陽パネルといった新たな環境事業でグループ協力が行われているとのことであった。

ノリタケは一貫して洋食器の製造販売を手がけてきたが、戦時中に平和産業であるとして製造を停止せざるを得なくなった時期、一方で売上げを伸ばしたのが陶磁器製造道具の研削砥石であった。戦後1950年代には研削油販売、砥石工場の操業開始、そしてダイヤモンド工具等の製造・販売割合を増やし、1973年には京都でノリタケダイヤ（株）を設立、さらにこれを移転

させる形で久留米にノリタケダイヤ本社工場として 1975 年に操業開始したのが現在のノリタケ久留米工場である。ノリタケにおける現在の事業展開の柱は、食器事業、エンジニアリング事業、セラミック等の原材料事業、工業機材事業の 4 つだが、私たちが持つ“ノリタケのイメージ”である洋食器のシェアは全体の 7%ほどで、先の経緯から、ここ久留米工場で製造しているような工業機材事業が実に 70%を占めているという。

現在久留米工場には 380 名の従業員がおり、ダイヤモンド工具を中心とした機材の設計、開発、製造を行っている。工場見学では、ダイヤモンド CBN 工具プラントを案内していただいたが、特に成型後の旋盤工程での従業員の作業はまさに“職人的”なものという印象が強かった。説明の際にも工場の作業は“アナログ”で「陶器生産よりも人の多い、密集度の高い工場」であると聞いていたが、作業者はそれぞれの持ち場の機械に習熟し、さまざまな工具を使いこなしていた。新入社員は NC から入るそうで、汎用は特に熟練を要するとのことであった。貴重な現場を見せていただきながら、社屋に飾られている美しいノリタケ陶磁器とのギャップを新鮮に感じたノリタケ久留米工場の視察が終わった。



写真 12：ノリタケ久留米の中川氏と久保氏とともに工場前で

訪問地 4：武雄市図書館 [武雄市武雄町]

ノリタケカンパニーリミテドから 70 分ほどバスに乗ると福岡県から佐賀県に入り、同時に実態調査も後半に入った。18：00 に武雄市図書館に到着し、館内を自由行動で見学した。武雄市図書館は、今回の実態調査企画の時点で、北九州から伊万里に向かうのであれば、ぜひ武雄市図書館へ寄ってはどうかという所員の声によって組み込まれた訪問先である。この図書館の名が全国区で知られているのは、まずは図書館の中に TUTAYA や、スターバックスが入っていることに始まるだろう。2013 年、民間会社が指定管理者となって運営を開始＝リニューアルしたことが新しい図書館の在り方として注目を集めてきた。この民間会社とは、「書店事業を中心

としたエンタテインメント事業、図書館を核とした公共サービスや地域共生に関わる事業」を展開するカルチャ・コンビニエンス・クラブ会社（CCC）である（その後 2015 年に海老名市立中央図書館、2016 年に宮城県多賀城市立図書館、2017 年に岡山県高梁市図書館、2018 年に山口県の周南市立徳山駅前図書館も指定管理者として運営開始）。入って驚くのは、その明るさと開放感、雰囲気よさであった（写真 13・14）。カフェにはショップが併設されており、本や雑誌の購入はもとより、ちょっとした雑貨なども並んでいてなかなか楽しい空間になっている。地元の人々はもちろん県内外からの見学目的の観光客等多くの人々が立ち寄る場所となっているらしかった。特に、学習スペースには地元の人々や高校生の読書、調べもの、勉強空間としてほどよく埋まっており、利用者数の多さと居心地の良さが伝わってきた。

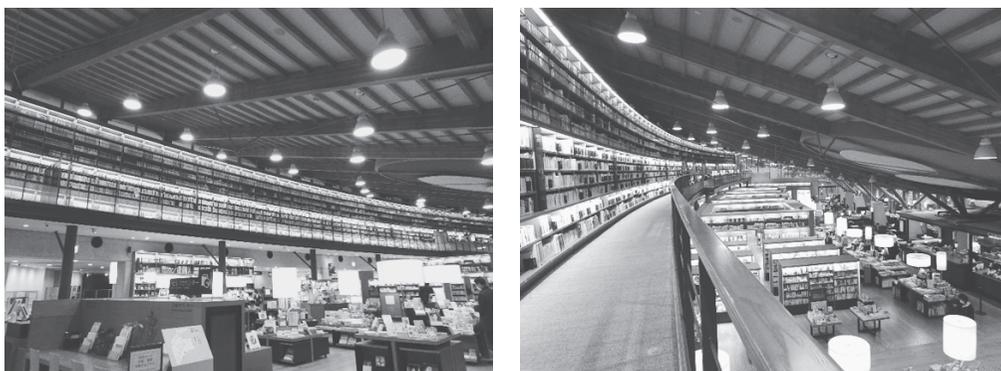


写真 13・14：武雄市図書館内の様子（写真撮影所は 1 階と 2 階のこの 2 か所からのみ）

温泉宿泊施設も数多くあり、実は陶芸のまちでもあって国際観光モデル指定都市となっている“武雄市”での滞在時間は残念ながらこの武雄市図書館での 30 分程度となった。図書館を後にしてバスに揺られると 30 分もしないうちに次の目的地となる伊万里市に入り、この日から 3 日間お世話になる伊万里グランドホテルに到着した。

第 4 日目：2 月 28 日(金)

実態調査第 4 日目、本来の午前中の予定は名村造船所伊万里事業所の訪問・見学であった。しかし、行程 2 日目に、新型コロナウイルス感染症の影響により今回の見学は見送らせてほしいとの連絡が入ったため、急遽予定を変更し伊万里大川内山を見学することになっていた。

訪問地 1：伊万里大川内山 [伊万里市大川内町]

10：00 前に到着した伊万里大川内山では 2 時間弱の自由行動による見学時間を設けた。

伊万里大川内山は、“秘窯の里”とも呼ばれ、延宝3（1675）年から廃藩置県まで朝廷や将軍家等に献上するための磁器を焼く鍋島藩の御用釜が置かれていたところである。御用釜で焼かれたものを「鍋島」と呼んでおり、その伝統を継いだのが現在の「伊万里焼」である。明治時代まで伊万里と有田の焼き物はすべて伊万里港から積み出されていたので、伊万里の地名はそれらの焼き物の総称でもあった。

入り口バス駐車場前にある伊万里・有田伝統産業会館で、伊万里焼と有田焼の概要を確認した後、美しい陶器の埋め込まれた小さな橋を渡って大川内山の石畳の道へ足を踏み入ると道の両脇に窯元が立ち並んでいる（写真15）。



写真 15：伊万里大川内山石畳の街並み

目抜き通りらしき道、鍋島藩窯坂に入る手前の角にある“御庭焼窯”に入ってみた。鍋島藩主から杏葉紋の使用を許された唯一の窯元で、呉須で染付された青を基調に、赤、緑、黄のような色が差された花鳥中心の伝統的で上品な上絵が施されていた。他にも大川内山には現在30軒以上の窯元が在り、限られたいくつかの窯元の店に入って話をうかがってみると、窯業技術や製造過程のしくみ、そして出来上がる磁器もそれぞれであり、窯の個性が守られて制作されていることがとても興味深い里であった。

訪問地2：伊万里まちあるき

昼食休憩の後、伊万里駅前前で待ち合わせていたのは「幕末・明治期の伊万里近代化の軌跡」というテーマで伊万里のまちを案内していただくことになっていた伊万里市郷土研究会の会長であり、松浦党研究連合会会長でもある松尾清氏であった。

伊万里川河口に位置する伊万里は、寛永年間に肥前地域で焼かれた陶磁器を積み出す港町として栄えた地である。先にも記したが、肥前の焼き物はすべて積み出し港の名前である伊万里津の名を冠して“イマリ”と呼ばれていた。明治30（1897）年に門司～有田～佐世保間の鉄道が開通し陶磁器の輸送が船から鉄道に変わってから、焼き物は有田町の「有田焼」や伊万里大川内山の「伊万里焼」など焼かれた土地の名で呼ばれるようになったのである。

駅から伊万里川方面に向かって歩き始めると間もなく、一人であれば見過ごしてしまいそうな幅2メートル程の水路の上で松尾氏が立ち止まった（写真16）。海を埋め立ててできた伊万里の町は、かつて井戸を掘っても塩水しか出ず生活用水に苦勞した町であった。それで人々は



写真 16 : “堀” から水道敷設へ話を聞く

あちこちにこのような“堀”をつくっては水を確保したが、江戸～明治期に人口が増える
と大量の排泄水が流されるようになり、その
不衛生さを憂慮した二代目町長中村千代松
が町民の衛生教育を行うとともに水道敷設
を企図する。伊万里川の水を用い、当時地元
有力者であり東京で機械製作会社を経営し
ていた松尾廣吉の協力で水源地が建設され、
大正 4 (1915) 年に佐賀で第 1 号、九州で第
4 号の上水道が完成するのである。今、町
の中にある“堀”はその名残で、平成に入っ
てからは暗渠にして道路となっているところ
も多いという。何気ない用水路一つにも伊万

里の土地の記憶と、町・人の繁栄や移り変わりが刻まれていることを実感した。

ちなみに、水道敷設に尽力した松尾廣吉は、専修大学社会科学研究所の現所長である宮寄晃
臣氏の曾祖父に当たる方であり、そのご長女が宮寄所長のお祖母様になる。ご縁を感じつつ、
伊万里の町の再開発が始まるまで松尾家の居住地であったという場所に案内されたが、ここは
かつて藩札交換所があった場所とのことであった。

さらに道を北上しつつ、江戸時代の伊万里には 80～90 軒の陶器商の家があって地方中心都
市として繁栄していたという話をうかがう。帆掛船、手こぎ船で陶器を港へ運び、大きな船に
積み込まれると輸出用のものは長崎出島へと運ばれ、この出島を中継地として伊万里焼が世界
へ広がっていったのである。

次の見学場所は、創業明和元 (1764) 年頃と伝わる伊万里屈指の陶器商犬塚家の住宅、伊万
里市陶器商家資料館であった。犬塚家は昭和の初めまで商売をしていたが後継がなく店をたた
んだという。『資料館だより』によれば、犬塚家は伊万里津の間屋仲間から大量の陶磁器を仕入
れては江戸向けに積み出しており、5 代目当主の弟である犬塚駒吉は、19 世紀には江戸陶磁蔵
元 (江戸深川佐賀藩の陶磁器販売所の支店長のようなもの) になり、江戸深川の開拓にも尽力
するほどの財力をもっていたという。そんな犬塚家 (つまりは陶器商たち) の商売と生活ぶり
が伝わるのがこの資料館である。現存のものは文政 8 (1825) 年に建てられた妻入二階建てで、
外観は白壁土蔵造、中はうなぎの寝床状の奥に細長い造りになっている。採光や通風の工夫、
収納スペースの取り方、全国遠方から集まる陶器商人たちの接待をするための造りと道具の
数々が (写真 17)、落ち着いたある粋な雰囲気とそれを支える構造のよくマッチした空間を作



写真 17：一階から仕入れ荷物を滑車で吊り上げる



写真 18：右手に佐賀銀行、左手奥に旧犬塚家

り上げていた。

陶器商家資料館の見学に続いて佐賀銀行伊万里支店に案内された（写真 18）。ここは佐賀県内の私立銀行第 1 号であったかつての伊万里銀行である。通常業務をしている銀行内を通り抜け、上階の資料室へ通された。明治 15（1882）年設立当時、県内他行の資本金が 15～20 万円のところ伊万里銀行の資本金は 37 万（およそ 30 億円ほど）であったことから、当時の商都としての財力の大きさが分かるというものである。佐賀銀行のあゆみを見ると、昭和 14（1939）年に伊万里銀行が他行と合併して佐賀興業銀行となり、その後佐賀中央銀行と合併して現在の佐賀銀行になったのは昭和 30（1955）年である。伊万里銀行の名は戦前にはなくなっていたようだが、佐賀銀行資料室で伊万里銀行に関する文書類一株主らしき名簿帳や出勤簿などの興味深い資料の数々、他に当時の伊万里銀行の表札などを目にすることができた。

佐賀銀行を後にするとすぐに伊万里川にかかる相生橋に着いた。初代の橋は、明治 17（1884）年に町でも有力な陶器商で、森永製菓創業者・森永太郎を養子にして育てた山崎文左衛門をはじめとする有志たちの私財によって架橋されたとのことで、欄干は大きな伊万里焼の人形や壺で加飾されていた。橋を渡ってしばらく行くと右手にまちあるきの終点：伊万里市歴史民俗資料館が見



写真 19：民俗資料館前で松尾氏（前中央）と

えてきた。資料館では、伊万里についての古墳時代、中世期、近世期の郷土史料があり展示もされていた。再び松浦氏に話をうかがうなど、メンバーそれぞれの関心によって見学や聞き取りを行い、ここで伊万里近代化の道筋をたどるまちあるきは終了となった。松尾氏と記念撮影し（写真 19）、私たちの乗ったバスは次の目的地有田町へ向かって出発した。

訪問地 3：有限会社 やま平窯（有田焼窯元） [佐賀県西松浦郡有田町]

工場見学のために平日の訪問をお願いしていた有田焼の窯元“やま平窯”へは終業時間一時間前の 16:00 になんとかたどり着いた。やま平窯の代表取締役であり専修大学経営学部を卒業されたという山本博文氏に対応いただいた。

やま平窯は、窯元の次男であった山本氏の祖父山本平作氏が独立し（名前の二文字を取って）「山平窯」を開いたことに始まる。昭和 47（1972）年には父である先代が法人化して「やま平窯」となり、その後を継いだのが博文氏である。

有田は戦後業務用食器で生産を伸ばしてきた産地であり、やま平窯も先代から東北・北海道を中心に 1000 人も 2000 人も団体客を取る地方旅館の業務用食器を手がけてきた。お膳映えのする大ぶりで機能性の高い商品を、有田の流通システムである地元商社を通して販売するのが伝統的な方法であった。しかし、10 年ほど前から旅館業界の状況が厳しくなると、それは有田の窯元にまで変化を迫るものとなっていった。そこでやま平窯が着手することになったのが一般家庭用食器の生産である。当初は都市ホテル向けの和モダンの食器を手掛けたことに始まるが、このテイストを家庭用に应用できないかと山本氏は考えた。まもなく家庭用食器の自社ブランドの展開を始め、その展開の中で、生産の柱を立ち上げたいという志向から生まれたのが現在のやま平窯の“売り”であり、卵の殻のように中が透けて見えるほど薄い“卵殻手”という技法で造られた磁器「エッグシェル」シリーズであった。私たちが訪れた直営ギャラリーにも入ってまず目に入る、厚さ 1mm 以下の薄く美しい磁器食器である。明治期にヨーロッパ向けに生産・輸出されていたものだそうで、やま平窯では、ガラス質を多めに配合した透明性のある土を用いて焼くことで、その技術を復活させたのである。現在では、地元商社を通して卸す業務用と地元には卸さず一般消費者に直販する独自ルートも開拓し、割合は半々くらいになっているという。

有田産地の窯元は 10 人程度の陶工を抱えるのが平均とのことだったが、やま平窯にも現在 10 名程度のスタッフがおり、成形、絵付け、窯詰め、削り仕上げなど一人がいくつかの役をこなしながら生産しているという。また興味深かったのは、山本氏が企画・デザインから商品を起こし、量産の安定化を目指して作業マニュアルまで作成するということであった。年間 50～60 個のデザインを起こすそうだが、1 つが商品化するまでには 1 年半ほどもかかるという。「な



写真 20：絵付け作業を見学



写真 21：代表取締役山本氏（右）と談笑する一行

なかなか出来上がりがイメージ 100%にならない」という山本氏の言葉からものづくりの苦労が伝わってくる。次々と投げかけられる質問に答えていただきながらの工場見学（写真 20）となり、山本氏の専修大学での思い出などもうかがいながら（写真 21）訪問・見学は終了となった。

やま平窯でのお話は、次の日に訪れた工業協同組合で聞くことになる有田陶磁器の生産・流通現代史の一つのモデルのようなものであったと後になって気づくことになる。まさに“有田産地”の変化を受容しながら代々生き抜いてきた窯元であるように思えた。

第 5 日目：2 月 29 日(土)

実態調査最終日となるこの日は、磁器発祥の地にて歴史をたどり、現在の有田焼のトレンドまで目にする、まさに有田焼にかかわる視察・見聞に終始する一日となった。

訪問地 1：佐賀県陶磁器工業協同組合 [佐賀県西松浦郡有田町]

最終日は、有田町にある佐賀県陶磁器工業協同組合から始まった。事務局長の山口善広氏に迎えられ、佐賀県内の陶磁器の製造と流通についての内容を中心に質疑応答の形で話をうかがった（写真 22）。組合のあゆみは昭和 5（1930）年の有田陶磁器工業組合設立に始まり、いくつかの組織の合併や分離による改組・名称変更を重ねて昭和 44（1969）年に現在の佐賀県陶磁器工業協同組合となった。所属する事業所は有田、伊万里、吉田（嬉野）地区にまたがっている。陶磁器は全国的にみると工芸部門と産業部門の組織団体があるが、この組合は後者の団体で、（財）日本陶業連盟の一組織として連なっている。現在 89 軒の窯元（事業所）から成る佐賀県陶磁器工業協同組合の最も大きな役割（業務）は、窯元が、受注で納めた先の小売商社（約 120 軒）から陶磁器の集金を代行することであり、加えて窯元の福利厚生事業を行うことであるという。



写真 22：佐賀県陶磁器工業協同組合にて説明を受ける



写真 23：職人による絵付け作業

産地の分業は、基本的には産地の要である窯元が、前日に訪問したやま平窯の山本氏がそうであったように、素焼き以降の作業である下絵、釉薬、焼成、上絵付、と様々な仕事を行うのだが、産地全体としてみると窯元に粘土を提供する陶土製造業者、窯元から委託されて鑄込み成型を行う生地製造業者、上絵付を請負う業者、石膏型製造業者など様々な生産者がかかわっている。また、陶土は作陶しやすさから天草の陶土が使用されており、この陶土を採掘する専門業者もいる。

特に陶土採掘では設備老朽化と後継者の問題があるとのことであったが、現在、窯元の数も一貫して減り続けており（平成元年には 153 軒あった）、これには流通・販売状況の変化が関係している。これまで一般的であった窯元から小売商社へ、そこから有田の主力販売先である全国のホテル・旅館や料理屋へという陶磁器の流通ルートが、現在、ホテル・旅館を始めとする観光関連での需要の減少によって、縮小傾向にあるという。代わって今は産地卸商社を通した、あるいは直接的な形で一般消費者に届くというのが量的にも大きな流れになりつつあるという。これは前日訪問したやま平窯の経験と一致するものであった。

佐賀陶磁器の製造と流通についてのお話の後、広い会場に展示されていた窯元の製品を見学した。一窯元 80 cm 四方ほどの空間に、それぞれの窯の特徴と個性が象徴された製品と窯元からのメッセージが添えられている、という趣向である。シンプルなものから華やかなもの、力強いものや繊細なものまで、一同に会されると違いがよく分かり、楽しい空間でもあった。絵付けの実演も見せていただきながら（写真 23）、会場を一回りするとすでに出発の時間になっていた。

訪問地 2：泉山磁石場 [佐賀県西松浦郡有田町]

雨の降る中、11：00 過ぎに泉山磁石場に到着した。ここは国指定史跡で、現在はほとんど行われていないとのことであったが、有田焼の原料となる陶石の採掘場である。江戸初期の 1616（元和 2）年、朝鮮人陶工の李参平によってここで陶石が発見され、採掘がはじまったのであり、日本で初めて磁器が誕生したところ「日本磁器発祥の地」といわれている。掘り続けられた山の姿は、やや威圧的でありながら、もの悲しさも感じる圧巻の場所であった（写真 24）。



写真 24：泉山磁石場

“有田焼”はここから始まったといってよい。良質な陶石が安定して採れるようになると、佐賀藩による本格的な焼き物作りがはじまり、有田焼が誕生すると有田は日本の磁器発祥の地として発展していく。泉山磁石場は江戸時代には皿山代官所が、明治に入ると有田の窯焼き（陶磁器製造業者）によって管理され、明治 30（1897）年頃までは年間 12,000 トンもの陶石が掘られていたという。現在の風景は、採掘によって山が円周を残してほぼ無くなった状態である。この泉山磁石場では、成形用と釉薬用の陶石が採れ、採る場所によって石が使い分けられていたという（前日組合でもうかがったように、現在、有田焼の材料はほとんど天草のものが使用されている）。

磁石場から少し歩くと、真っ白な李参平像が祭られており、また、かつて採掘後の穴に作業の無事を祈願して祀られていた神様が合祀されているという石場神社もあった。

その後、有田駅近くにあつて有田焼の食器で食事を提供し、またさまざまな窯元の有田焼を手にとって購入もできる店、ギャラリー有田で昼食休憩を取った。

訪問地3：佐賀県立九州陶磁文化館 [佐賀県西松浦郡有田町]

午後には佐賀県立九州陶磁文化館を見学することになっていた。文化館では、有田焼や伊万里焼をはじめとする佐賀県の陶磁器はもちろんのこと、九州各地の陶磁器と、その関連資料が集められた施設であり、そのパンフレットには「歴史的・美術的・産業的にみて、重要な陶磁器資料を収集・保存・展示し、あわせて調査研究や教育普及活動を行って」いるとある。その説明通り、常設展示には、九州陶磁の歴史に関する部屋と九州の古陶磁（古唐津や古伊万里、九州他県の焼き物も）が展示された部屋、現代の九州の陶芸（陶芸家の入選作品など）が展示された部屋があったが、特に歴史に関する展示は、焼き物の分類や日本における焼き物発祥についての基本的な知識が得られるものになっており、続いて九州地方の焼き物がどのように展開してきたのかがとても分かりやすいパネル展示となっている。同室にあって文化館の“売り”でもある蒲原コレクションはかつて輸出された古伊万里とのことだったが、展示ケースに所狭しに並び（100点ほど）、そのきらびやかな造形と繊細な絵付けは見応えがあった。個人的には階下の部屋に展示された、17～18世紀の古伊万里“柴田夫妻コレクション”（寄贈数1万点から常時1000点を展示）の、日常になじむような静かで落ち着いた作品の数々が印象に残っている。

さて、こうして実態調査の後半は伊万里焼・有田焼関連の施設を中心に見て回ったのだが、そこには伝統を守るだけではなく、未来を志向した産業としての、あるいは芸術としての創造的な発展の取り組みがあることを知ることができた。

陶磁器文化館を出たバスは一度有田駅へ寄り、新幹線で岐路につく、もしくは他の調査地へ向かう参加者を降ろすと、実態調査としての最後の訪問先有田町歴史民俗資料館に立ち寄り、その後佐賀空港へ向けて80分のバス移動となった。17:00過ぎに佐賀空港に到着、ここで2019年度春季実態調査は終了した。

謝辞

最初に記したように、新型コロナウイルス感染症の警戒レベルが上がりつつある中、私たちの訪問をこころよく、万全の態勢でお迎えいただき、そして見学や質疑応答にも細やかにご対応をいただきました訪問先の企業・施設の皆様方には心より感謝申し上げます。おかげさまでとても印象深く、充実した実態調査となりました。本当にありがとうございました。

また、実態調査に先立つ2020年1月29日（水）には行程説明会も兼ねた事前研究会を開催し（於：生田校舎2号館224教室）、講師として公益財団法人九州経済調査協会 事業開発部の小柳真二氏をお招きし、「九州の地域・産業の構造と近年の動向」についてご講義いただきました。実態調査に向けて北九州と佐賀県の産業を中心とした地域についての事前の理解を深めることができたことを改めて御礼申し上げます。